

## 様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成22年 3月18日現在

研究種目：基盤研究（C）  
研究期間：2007～2008  
課題番号：19530735  
研究課題名（和文） 近代中国における日本留学帰国者の社会的活動  
研究課題名（英文） Social Activities of Students in Modern China who have Returned from Learning in Japan

### 研究代表者

佐藤 尚子 (HISAKO SATOU)  
神戸山手大学・現代社会学部・教授  
研究者番号：10215824

研究成果の概要：本研究の目的は、中国人の日本留学が始まった清朝末期から社会主義中国直前までを対象として彼らの帰国後の社会的活動を明らかにすることにあった。研究期間内に明らかになったことは、一部の地域で教育界における日本留学帰国者の活動が確認できたことである。高等教育での活動のみならず、普及が遅々として進まない初等・中等教育での活動も窺い知ることができた。

### 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：教育史

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：中国人名辞典、中国人留学生、帰国留学生、中国近代化、中国要人録

## 1. 研究開始当初の背景

明治・大正・昭和前期の日本には、アジア諸国・地域より多くの留学生が来日した。留学生は、彼らの母国より一歩先んじて近代化した日本に学び、自国における近代化の促進に著大な足跡を残している。留学生を通じて戦前期日本のアジアの近代化に果たした役割は一般に考えられているよりも深く広いものかと思われる。特に、中国からは多数の留学生が来日しピーク時には8千名を超えたといわれている。中国人留学生たちは日本を通して近代文化・技術・思想などを学び、国際社会の趨勢を知り、日本において様々な文化・政治的活動を展開した。彼らが日中関係史上において果たした役割は大きい。帰国後、日本に学んだ多くの中国人留学生たちは、中国近代化のための様々な文化的・政治的・経済的・社会的活動を展開したと思われる。

日本における留日学生史研究を本格化させたのは実藤恵秀(ペンネームさねとうけいしゅう)氏である。氏の1939年『中国人日本留学史稿』に始まる一連の関連著作は今でも参考にされるが、文化交流を中心に研究されたものである。新しい角度からの研究は阿部洋氏によるもので、同氏編集の『日中教育文化交流と摩擦』(第一書房、1983年)では留学生教育制度・政策などの教育学的検討が行われるようになった。中国においては、戦後長期にわたり日本との国交がなかったため留日学生問題が研究の対象となつてこなかった。やっと、李喜所『近代中国的留学生』(人民出版社)が刊行されたのは1987年である。1997年には、沈殿成『中国人留学日本百年史』(遼寧教育出版)が出されている。台湾では黄福慶『清末留日学生』(中央研究院近代史研究所、1975年)が出版されている。米国ではレイノルズ氏により、中国人留学生の渡来が相次いだ時期が日中関係史の忘れられた黄金の十年として捉えられている(Douglas R. Reynolds, *CHINA, 1898-1912*, Harvard College, 1993)。

その後、日本においては中国人留学生史研究が著しく進むようになった。阿部洋『中国の近代教育と日本』(福村出版、1990年、龍溪書舎より2002年に第2版)は、清朝末期時期を対象に東京にあった留学生教育諸学校とその卒業生を明らかにしたものである。それによると、清朝末期には師範留学生が多く、帰国後、北洋師範学堂長となった李士偉、京師法政学堂教務長となった江庸、北京法律学堂教師となった張孝移など中国教育界で活躍したのが多いということである。ただ、1912年以降の中華民国時代はどうであったのかについては検討されていない。また、同氏による米国帰国留学生の研究もある。「解放前中国における人材養成とアメリカ留学」(東亜文化研究所編『中国近代化の史的展望』霞山会、1982年所収)では、「これらを通して、我々は中国近代における海外留学の主流が、清末民初を境に日本留学からアメリカ留学へと転換していく、いわば流れの変化を読み取ることが出来るのである。」と言い(同書86頁)、米国留学が圧倒的優位性を維持し続けたと結論づけている。

最近では当時の中国人留学生諸学校の後進校において、中国人留学生を学校史研究の対象とするようになった。王嵐『戦前日本の高等商業学校における中国人留学生に関する研究』(学文社、2004年)、坂口直樹『戦前同志社の台湾留学生』(白帝社、2002年)、周一川『中国人女性の日本留学史研究』(図書刊行会、2000年)、河路由佳他『戦時体制下の農業教育と中国人留学生—1935—1944年の東京高等農林学校—』(農林統計協会、2003年)などが出版されているが、かつての留学生諸学校の一部にすぎない。

大里浩秋・孫安石編『中国人日本留学史研究の現段階』(御茶の水書房、2002年)によれば、「留学生による革命や抗日運動への参加の歴史としてでなく、教育内容や生活環境や帰国後の動向なども加えて検討したい。」ということであった(同書iii頁)。ここからわかるのは、中国近代化における留日学生の役割として、近代中国の民族運動や政治変革に関しては研究書や論文が多いということである。前述した実藤・李喜所・沈殿成・黄福慶氏の研究はいずれもそうであった。研究成果が乏しいのは、中国の経済発展や中国の学術・教育の発展に果たした留日学生の役割ということになる。そのため、本研究では留学が開始された清朝末期から社会主義中国直前までを対象として日本留学帰国者の社会的活動を明らかにしてみようということになった。

## 2. 研究の目的

前述したように、阿部洋氏の研究に中国人米国留学生の研究があり、彼らの帰国後の社会的活動についての言及がある。したがって、本研究では以下の2点の目的を掲げた。

(1) 日本留学帰国者の社会的活動について、その特色を明確にしなければならないであろう。米

国留学帰国者と違って、どのような分野で活躍したのかを数量的に計る方法を考え、日本留学帰国者の特色を大まかに描くことを目指す。

(2) 学術・教育の発展に果たした役割が重要であると考えられるので、この分野に関して、いわば質的にとらえることが必要になってくるであろう。本研究では、初等・中等・高等教育、および様々な教育組織における日本留学帰国者の活動を、米国留学帰国者と比較しながら明らかにすることを旨とする。

### 3. 研究の方法

(1) 各種人名事典を用い、その中から日本留学帰国者を抽出し、データベースを作成する。その上で、活動分野ごとに集計し、日本留学帰国者の特色を分析する。

活動分野については次の9種により分類する。①教育界(初等・中等・高等教育)。②軍部(国民党・共産党)。③政治家と革命家(清朝末期・中華民国時代)。④官僚。⑤産業界。⑥ジャーナリズム。⑦学界。⑧芸術・文学界。⑨女性。

人名事典については、日本側資料として①『日本留学支那人録』(興亜院政務部、昭和17年)、②『中国文化界人物総鑑』(橋川時雄纂、中華法令編印館、昭和15年、名著普及会、昭和57年)、③『清末民初中國官紳人名録』(田原天南編、中國研究會、1918年)を、中国側資料として④『中国留学生大辞典』(周棉主編、南京大学出版、1999年)、⑤『中華留学名人辞典』(東北師範大学出版社、1992年)、⑥『中華民国名人伝』(李雲漢主編、近代中國出版社、1993年)、⑦『民國人物小傳』(劉紹唐主編、傳記文學社、1982年)を用いる。

(2) 上記各分野の中から比較的影響の大きかったと思われる教育界を取り上げる。具体的には、①清朝末期から日本をモデルにした高等師範学校が活動を展開していたことからそうした学校における活動を取り上げる。②事例研究として浙江省を取り上げる。

### 4. 研究成果

#### (1) 研究の主な成果

前述のような目的・方法を設定し、研究を進めてきたが、実際に用いることができた資料は、前述の人名事典のうち、②『中国文化界人物総鑑』、④『中国留学生大辞典』に加え、当初は用いることを予定していなかった『現代中華民国満州帝国人名鑑』(1937年)であった。また、活動分野の分類も試みたが、全ての人名事典を網羅することができなかった。そのため、分類は完了していない。しかしながら、次のような成果も得られた。大きくは以下の2点にまとめられる。

①研究協力者の高益民(北京師範大学・国際比較教育研究所)は、北京師範大学の歴史から、当大学の公文書を使って分析した。それによると、中華民国前期(北京政府期)に、北京師範大学(北京高師、女子師範大学)は完全に日本留学帰国者によって掌握されていたこと、当大学教員も日本留学帰国者が大きな割合を占めていたこと、しかし、1910年代にほぼ半数を占めていた日本留学帰国者が1920年代に入ってから4分の1を占めるにとどまったことなどが明白になった。

また、同じく研究協力者の汪輝(浙江大学・教育学院高等教育研究所)は、学生の主な留学先が日本から米国へと変化した1920年代以降の日本留学帰国者による社会的活動の特色を、浙江省を中心にいくつかの同窓録から明らかにした。それによると、現段階で履歴がわかった340名の日本留学帰国者の最終職業のうち、最も多かったのは、大学教員および専門学校教員など教育関係の職であることがわかった。

②前述したように分類は完了していないが、幾つかの人名事典により日本留学帰国者を抽出していく過程で、彼らが帰国後にやはり政治や経済、文化の分野で活躍していたことがおおよそ把握できたが、同時に教育に関する活動も行われていたことがわかった。特に、前述④『中国留学生大辞典』を用い、山東省を中心にそうした彼らの帰国後における活動に着目した。

山東省を事例としてみると、1903年から1916年までの間に日本留学帰国者によって設立された初等・中等教育機関が決して少なくなかったことがわかる。また、その教育機関は

小学校と中学校の設立が中心であった。一方で、設立者の経歴によると、彼らが裕福な家庭で生まれ、高学歴であったということや、出身地である山東省を中心に、自身の専門分野にかかわらず学校を設立したことなども明らかになった。

教育界での活躍は高等教育、中等教育、初等教育、社会教育、教育行政など多面的にみられたが、特に清末から民初にかけてあまり普及していなかったとみられる初等・中等教育の普及が日本留学帰国者の活動により少しずつ成し遂げられていったとみられる様相も窺い知ることができた。

#### (2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

中国近代化における留日学生の役割として、近代中国の民族運動や政治変革に関しては研究書や論文が多い。これに比べて、中国の経済発展や中国の学術・教育の発展に果たした留日学生の役割については取り組みが手薄とみられる。

本研究では、とりわけ教育界での活動が一部ではあるが確認できた。一部というのは、北京師範大学での活動や浙江省ならびに山東省での活動である。清末民初を境に日本留学からアメリカ留学へと転換していく流れの変化が先行研究により指摘されているが、大きな流れはそうであったとしても、留日帰国者が教育界でも活動していたという事実を見過ごすわけにはいかない。

本研究は、試論的考察にとどまったが、留日帰国者が各地域で教育界のどのような分野で活躍したのかを具体的に掘り下げていく必要があることを提示したといえよう。

#### (3) 今後の展望

3. 研究の方法で記したように、本研究では、各種人名事典を用いて日本留学帰国者を抽出し、彼らの活動分野を9種により分類する予定であったが、詰まるどころ教育界で活動したとみられる者にしか焦点をあてることができなかつた。しかも用いることを予定していた人名事典の全てを網羅することもできていない。教育界での活動に関する研究の端緒を提示することはできたといえるが、今後は並行して日本留学帰国者の社会的活動の全体像を大まかに把握することがまずは求められよう。

また、教育界に焦点をあて、分野ごとに活動を具体的に明らかにしていくことも今後の課題として残されている。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

①高益民、汪輝(以上2名、研究協力者)、近代中国における日本留学帰国者の社会的活動、アジア教育学会第2回大会、2007年11月3日、神戸山手大学

②佐藤尚子、今井航、丁健、潘静、近代中国における日本留学帰国者の社会的活動に関する試論的考察、アジア教育学会第3回大会、2008年10月25日、専修大学

〔その他〕

ホームページ等

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

佐藤 尚子 (HISAKO SATOU)

神戸山手大学・現代社会学部・教授

研究者番号：10215824

#### (2) 研究分担者

今井 航 (WATARU IMAI)

別府大学・文学部・准教授  
研究者番号：20432700

(3) 連携研究者  
( )

研究者番号：

(4) 研究協力者  
高益民  
北京師範大学・国際比較教育研究所・副教授

汪輝  
浙江大学・教育学院高等教育研究所・副教授